

Title	人間疎外と実存思想
Sub Title	The alienation of man and the thought of human existence
Author	務台, 理作(Mutai, Risaku)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1960
Jtitle	哲學 No.38 (1960. 11) ,p.25- 48
JaLC DOI	
Abstract	The alienation of man is common in various phases of modern life, so much so that the present age is called "the age of man's alienation." Diverse views have been advanced as to what the real cause of this alienation is. In my opinion, these views can be classified into the following three types: (1) The alienation of man is attributed to the limitations and contingency of man. In this view, the alienation of man is the inevitable outcome of the loss of human communion with God or the absolute. (2) the alienation of man is attributed to the widening gap between human cognition and the rapid advancement in mechanical civilization. (3) the alienation of man is attributed to the social institutions and social organization of our times. The advancement in technology and the development of machinery, however, are not responsible by themselves for the alienation of man. I think all these three types of views can claim validity in their own spheres. What is most important in our modern situation is, however, that we should recognize the alienation of man as our problem and tackle it in all sincerity. "To tackle it in all sincerity" may admittedly be 100 colloquial but I use this expression in the meaning of the German verb "sich verhalten zu" or the French verb "s'engager." I believe human existence in existential philosophy must be understood in this context.
Notes	横山松三郎先生古稀記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000038-0032

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人間疎外と実存思想

務台理作

一

われわれは現代の人間がいろいろな形で疎外されているかを知らされている。現代は大げさにいうと「人間疎外の時代」ともいえそうである。マス・コミ、マス・プロ、オートメーション、原子力の開発、電子精密機械というような巨大な技術の網があり、それによる人間の機械化と劃一化、その中における人間のアトム化と相互のよそよそしさ、こういう事実是谁でもじかに感じとることができる。人間は巨大な機械と技術のメカニズムに組み込まれるとお互にアトム化された個人に分離してしまう。たとえばマス・コミの洪水の中では、人と人とは大きくつながっているようにみえて、じつは互に疎外されているのである。一つの組織の中における成員と成員の関係も同様である。すべてこれは、人間の労働ならびに労働による生産が商品化され、物化されているという現代の特徴を反映しているものである。現代は巨大な商品生産の時代であるといわれる。人間の精神的・肉体的な労働力そのものまで商品化されていることは、生産労働者の労働力はもろんのこと、知識人のアルバイトが、その内容の価値を別として、いっばんに商品化されていることから推測できる。マス・コミの巨大な氾濫の中で、各人は却つて全体的なコミュニケーションを失うという皮肉も、商品化の事実と関係している。

商品は使用価値を媒介としても、それによつて存在するものでなく、ただ抽象的な交換価値によつて存在する対象物であるといわれる。それは誰が誰に向つて生産し、また誰がじつさいそれを消費するかという労働の人間的關係をまったく抽象化している。とくにマス・プロになると、生産者と消費者との間の人間的つながりのイメージがまったくすれ、労働本来の人間の意味が失われてしまう。労働の分業と機械化が進むほどそうならざるをえない。このことは当然労働の苦痛、味気なさとなつて生産者の側にはねかえってくる。毎日の仕事の中で、人間の意味、生活の意味、社会の意味、将来への希望、ヴィジョンを喪失する。つまり人間が疎外され、人間本来の存在が非人間化されていくのである。これは自由を愛する人間にとつてじつに耐えがたく息ぐるしい事実であろう。

このような人間疎外の事実からどうして人間を回復し、人間性を解放することができるだろうか。これが現代人の実践問題の重要な焦点になることは疑いがない。人間疎外の事実は許されるべきではない。どうしてこのような人間疎外が生じるか、その根源の原因を明かにして、それを克服しなければならぬ。これは現代人に負わされた大きな課題であるが、この課題ととりくむためには、何よりまず人間疎外、人間回復における「人間」とは何を意味するか、人間の何が疎外され、何を回復するべきであるかが明らかにされる必要がある。いつたい人間回復という場合の目標となるものは何であろうか。

私は、それこそ現実的人間の可能的総体としての「全体的人間」であろうと思う。疎外とはこの全体的人間がひき裂かれ、全体のつながりを失うことであり、疎外からの解放の目標は、この全体的人間の自己実現である。われわれが人生の幸福とよぶものも、またこの全体的人間の自己実現にはかならない。それならば、全体的人間とはいったいどういうものであるのか。

いうまでもなくそれは現実的人間の可能的全体性である。可能的全体性などというと、甚だ抽象的で、觀念上の設定物のように受けとられやすいが、人間疎外の事実を認めるときに、われわれはすでに現実的人間の可能的全体性を前提しているのである。商品の巨大なマス・プロの中で、労働の分業が進められ、技術革新が高度化されていくと、それに関係する人間の全体的なものが分断され、部分化されていく。彼の仕事は全体の部分的役割しか果せなくなり、それが彼自身にはねかえつて、彼は他の失われた多くの部分を娯楽、趣味、慰安などによつて回復しようとする。しかしこの娯楽、慰安もやはりマス・プロによつて商品化されているので、彼の全体的なものがますます分断されていく。彼の全体的なものがバラバラにされるのである。社会の巨大な構造の中で、人と人との関係がますますアトム化され、互につめたい他人となり、よそよそしくされる。これが現代の人間疎外の事実である。だから人間疎外というときは、すでにわれわれは人間現実の可能的全体を前提している。疎外とは、この全体的なものが分断されることである。全体的人間を前提せずにわれわれは人間性とか、人間性の疎外とか、それからの解放の問題をとり上げることができない。もちろん全体的人間は私の外に、私の彼岸にあるものでなく、私自身の主体性の可能的全体である。全体的人間とは誰にも或る意味で自分の可能的存在として予感され、熟知されているものなのである。

この全体的人間を明白な概念とするために、私はしばしば現実的人間と、その状況とを一つにしてこれを人間現実と名づけ、この人間現実を規定する基本的な二条件を考え、この二条件の総合として全体的人間を規定しようとした。しかしこの二条件のとり出し方、その総合の過程の捉え方について、私は多くの人から批判を加えられた。この小論はその批判に答えるとともに、私自身従来の二条件の論点から若干前進しようと試みたものである。

二

全体的人間の概念を明らかにするため現実的人間からとり出した人間現実の条件とは、社会的条件と実存的条件である。これについてはすでにたびたび叙述したのであるからここには略したいと思うが、ただ概観的に述べるならば、社会的条件は人間現実を共通に規定し、それによつて人間を社会的・歴史的存在たらしめる基本的な条件である。われわれがみずから生産せずに、他人の生産した衣食住その他の物資を手にして毎日の生活が続けるのも、この条件によるものである。われわれの職場、交通、集合、家庭、マス・コミ、娯楽等々の生活において、われわれを共通に規定し、われわれを組織または集団の一員として抗束し、連帯させているものがこの条件である。この社会的条件の中には、人間の社会的存在の土台となつている人間と自然との諸関係をも含むので、いわゆる自然的条件をもその中に内含させることができる。これにたいして実存的条件はわれわれの実存を可能にするもの、他人に手渡すことのできないめいめいの主体的存在を可能にする条件である。実存とは、だから社会的条件がこの主体性を対象化し客体化して、その中へ解消しようとする、これにたいしてつよく抵抗し自己を守ろうとする。もし社会的条件が人間関係を抽象化し非人間的条件とするならば、実存はその中で、何よりもそれを耐えがたく息ぐるしいものを感じる。このような実存をもつことも人間現実の事実である。実存はこの抵抗ゆえにこの社会の中にあつて、みずからをこの社会になじみがたい異邦人として生きねばならぬという運命を負わされる。人間は宇宙における中間者、偶然者、孤独者といわれるのも、人間をその実存において見ることである。人間はその実存のゆえに不安を負いその孤独に絶望しているともいわれる。人間はこのような規定を日常のザッへにおいてもつていてのではない。彼の可能性において、

そういう存在をもたざるをえないというのである。

人間現実はこのような二条件によつて根本的に規定されている。彼は一方で社会的存在であると同時に、他方において実存的存在である。実存とはときに社会にむかつてその主体性を過激に主張するが、社会はこの主体性を対象化し合理化して、みずからの組織の中へ解消しようとする。そうすると実存はいつそうつよくこれに抵抗するというように、両者はつよく対立する。このように対立する二条件を一つの人間現実において負わねばならないのが人間の問題である。たしかに社会的条件によつて実存を社会の中へ解消することもできないが、反対に実存一本から社会的条件をひき出すことも困難である。このような二つの条件が、人間疎外と人間回復の実践問題を媒介として綜合され、それによつて現実的人間を全体的人間へと高める。これが私のいう全体的人間の概念である。全体的というのは、両者を全体的にその中へ綜合しているという意味であるから、社会的存在だけで、或は実存的存在だけから人間を見ようとすることは、全体的人間を見ることにならない。こういうのが私の論点である。

私のこの見解にたいしていろいろの批判が加えられた。社会的条件については異論はないが、何故に実存的条件を出して社会的条件に対立させるのか、もともと実存と称するものは、社会的存在の一変形にすぎないものではないか、実存はとうぜん社会的条件から説明できるという批判が相当に多かつた。また反対に、実存的条件こそ人間を人間たらしめるものであるから、その不条理とか異邦人思想を検討して、実存から社会的存在をひき出すべきであるのに、社会的条件の役割を大きく認めるのは一種の妥協であつて、それでは実存本来の意味が失われるという批判もあつた。また人間現実が一方で社会的存在であり、他方で実存であるというのは一種の折衷主義であつて、人間現実の

問題をつきつめていないという批判、或は兩条件を対立させるのは一種の二元論であつて、これを綜合するといつてもその過程が明白でないという批判があつた。私はこれらの批判にはそれぞれの理由があることと思う。私は自分の立論にさいしてすでにそういう批評点を一通り検討してみたつもりである。それにもかかわらず以上のような批判が加えられるのは、いつに私の論述が不充分であり、論旨が明瞭を欠いたからであつたと自省しているしだいである。しかし私はこのいずれの批評にも服することはできない。いずれも私の真意についての理解が充分願われなかつたように思うからである。

私の二条件の問題は、大まかにいうと、実存主義哲学とマルクス主義哲学との関連問題である。ただ私はこれをマルクス主義と実存主義思想のワクの関連ということに制限されず、人間問題としていつそう広い立場から、即ち全体的人間の立場或は人類の立場から考えてみたいと思つたのである。マルクス主義と実存主義というワクの中で両者を綜合しようとしても、それは殆ど不可能に近いと思われるからである。私はいまなおこの問題はマルクス主義者によつても実存主義者によつても充分明らかにされてはいないと思う。マルクス主義者は、社会的条件を根源的条件として、人間現実がその中に実存を含んでいる事実を過少視している。マルクス主義によれば、人間はあたかも生れながらにして生産労働者であり、階級闘争意識をもち、特定の組織の中にあるかのように見られている。あたかも人間性格の深部にふかい影響を刻みこむ幼年時代・少年時代を持たないもののごとくである。また職場生活の外にあつて職場活動に影響を与えている大衆、地域、家庭などの社会心理関係についての考察も充分でないように思う。マルクス主義の社会構造の歴史的分析はきわめてすぐれたものであつて、それによつて私の教えられた点は多大であるが、人間現実をその深部において規定する性格・個性・人間の実存についての認識が充分でない。要するに実存思想

は階級闘争から脱落したプチ・ブル的な人間意識を反映したものに過ぎずその政治的無関心或は政治からの逃避が却つて反動政治、ファシズム政治に利益を与えるものになつていゝと見るのである。

実存哲学の政治的無関心、或は政治からの逃避がけつきよくファシズムの政治と思想に利益を与えろという見方は、マルクス主義のいわゆる味方の側に立たないものはすべて敵性をもつという論争法を保留した上で、私も賛成する。しかし実存は決して政治から逃避するものではないし、階級闘争にたいして無関心でいるものではない。私はすべて闘争というものの深部には実存があずかつていゝと思うものである。実存を社会的存在の一変形とし、実存哲学を觀念論の一形体とみて、これを解消しようとする見方には賛成することができない。

同様に実存哲学が人間疎外の原因を人間固有の本性としての有限性とか偶然性とか不完全性から導き出し、けつきよく絶對者を見失つたもの、絶對者に反逆したものの陥る運命とみて、その回復を絶對者への通路回復に求めるといゝ意見にたいし私は大きな疑問を感じる。人間疎外は人間固有の本性から出るものとすれば、それはつねに普遍的にひきおこされる事実になるが、私がここにとり上げた人間疎外は現代の特定の社会的制度に結びついたきわめて近代的な事実であると思う。この歴史的條件をよくつきとめずに、これを人間の本性に還元しようとするのは、人間が社会的存在であることを過少視するからである。人間の実存は後に詳論するように、人間疎外という歴史的な限界状況によつて成立するものであつて、当然のこと実存思想は近代的人格、とくに西欧的社会構造と深いつながりをもつものであるが、そのことについて実存哲学は重大な見落しをしていると思う。したがつて実存哲學者は、人間現實の社会的條件についての認識が不充分だといわねばならない。

こういう意味でマルクス主義者、実存主義者のいずれも、人間現実をその全体の構造において捉えることに成功していない。私は実存と社会的存在を人間現実において対立する二つの存在規定と見て、この両者が人間疎外の意味とその原因の問題、その解放の目標の問題を媒介とすることによつて、「全体的人間」の自己実現の形で綜合されるものと思う。或はその内容からみて人類の安全と幸福を守り、これを実現するという形で綜合されるものではないかと思う。両者についてその量と重さからみると社会的条件の方が圧倒的に優越しているが、しかしその質的關係において実存は主体性であり、この主体性を客体化しようとする社会的条件とつよく対立する。両者はこのような關係にあるわけだが、これが全体的人間の實踐において綜合されることになるのである。（この両者の弁証法的な關係については別に考察しなければならない）

こういうわけで、社会的条件のみを重んじて個人の主体性の実存を無視しようとする意見、反対に実存から社会的条件をひき出そうとする意見の両方を、私は受け入れることができない。なお、この両者の綜合としての全体的人間の意味を明らかにするために、さらに立ち入つて人間疎外の意味をとり上げてみることにしよう。

三

現代の人間がどのように疎外されているかについて、そのほんとうの意味と究極の原因について考察を進めてみよう。

人間疎外の意味と原因について、現代思想の中に三通りの考え方が行われていると思う。第一は、人間の疎外は人間固有の有限性、偶然性からひき起されるものとみる。したがつて人間疎外の事実はいつの時代にも生じる普遍的事

実であるという見方。第二は、第一の考えから出てくるものであるが、現代の機械・技術のメカニズムの発達こそ人間を機械化し、人間喪失を余儀なくさせるものであるから、機械・技術の人間支配をとり除くほかに人間回復のみちはないものとみる考え。第三は、これらの機械・技術はたしかに人間を機械化することによつて、人間を疎外して見えるように見えるが、じつさいの疎外の意味と原因は、機械や技術にあるのではなく、その背後にある現代の社会構造、社会制度の巨大なメカニズムにあるという考えである。この三つの考えについて述べてみよう。

第一、人間疎外は人間固有の本性に基づくという見地について。

これは神学的・形而上学見地に共通する考えである。人間は人間という被造物の立場において有限であり、不完全であり、偶然である。パスカルが『パンセ』の中で人間をば無限と虚無の間にある「中間者」と規定し、「無限なる宇宙の空間は私をおそれしめる」といい、この私のいる小さな空間が無限の空間のうちに沈んでいるのを思うとき、「私がここにいて、かしこにいないということにおそれとおどろきを感じる」といつているのは、この立場を代表していると思われる。彼にとつてはデカルト的確証は、ただ自分の足がおかれている小さな踏板を見ているにすぎない。デカルトはその小さな踏板が無限の虚無の深淵にさしかけられているのを知らずにいる。デカルトのコギトの確証には人間の条件、人間の状況というものがかえり見られていない。だからデカルトのコギトは中間者、偶然者としてのおそれをもたないというのである。

パスカルの人間の存在にたいする不安とおそれは、被造物の負わねばならない運命——中間性・偶然性をまぬがれない運命——つまりその有限性から出てくるものとみられる。それが人間の疎外の意味になる。人間である限りま

ぬがれえない運命という形で、人間はこの世において疎外されている。人間はこの世界の中で不安と絶望におのかねばならない。このような考えは、人間の実存をその固有の本性に結びつけて考える多くの実存哲学者にうけつがれている。人間疎外、人間喪失は、有限性から結果する。けつきよく、神、絶対者を見失い、それに反逆したものの負かねばならない運命であるとするのである。つまり人間疎外を人間固有の有限性の哲学から演繹してくるのである。それでこの立場によると、人間の本性の変わらないかぎり、人間疎外はいつの時代にもおこる普遍的な事実となる。人間であるかぎりまぬがれえない運命である。この思想の根底には、人間固有の運命、その有限性にたいするベシミズムの調子がつよい。実存思想の基本的条件である限界状況も、人間の有限性に基ずいているので、この限界を突破しようとしても挫折してしまふ。したがつてこの挫折からの解放のみちはただ神、絶対者への通路回復のほかにはない。解放は即ち上からの救済である。こういう考え方の中には神学的な調子が高くこめられている。この調子は神とか絶対者という言葉を使用しなくても、人間固有の本性に人間疎外の原因を求める思想に共通している。ヤスパーズの「包括者」、ハイデッガーの「ザイン」の思想にそれは受けつがれている。

この考えは、われわれのとり上げた問題にたいして正当であろうか。私はこの考えを次の二点から論評してみようと思う。(1)、私には人間固有の本性というような非状況的、非歴史的な定在があるかどうか疑問に感ぜられる。人間はギリシア時代からいろいろに定義されてきた。それがいろいろに定義されたということは、人間はつねに歴史的状況の中におかれ、歴史的状況が変化すると、それによつて人間自身のあり方も変化してきたからである。状況が変われば、人間も変わるのである。もし人間の固有の本性があるといえ、それはまさに歴史的状況の中で可変的・可能的存在をもつという規定だけであろう。人間はその歴史的状況によつてたえず変えられてきた。ただその中で比較的

変化の遅い部分が（そこに形式と質料が区別されるとすればその形式が）変化する部分を統一しているかに錯覚され、その形式を抽出して、それを絶対化したものがふつうに人間の本質とよばれるものではあるまいか。むかしからのいろいろな人間の定義も定義として間違っているわけではない。人間にはそれぞれの機能があるからである。しかしそれを恒常不変の實體的本質とみるところにあやまりがある。人間はそのような恒常な本質を持たない存在である。

人間が可変的可能的存在であつて、實體の本質をもたないということは、歴史的状況の構造の上からも考えられる。歴史的状況は何等の实体をもっていない。それはつねに変化する状況である。ただこの状況は「歴史的」状況としてその中に変化しながら継続するもの、時代によつて切断されながら継続するものをもっている。このような状況の変化と継続、切断と継続の関係を主体的にみずからの中へ反映して、人間存在は変化と、変化の統一を現わしている。状況の中に切断されながら継続するものがあれば、それを反映して人間にもまた継続するものが現われる。人間ははじめから固有の本質というものをもっていない。彼はただその状況によつてはかられる存在である。この点で私は人間疎外の原因を人間固有の非状況的・非歴史的な本性に求める考え方に賛成することができない。いわゆる固有の本性としてあげる有限性・偶然性は人間疎外の原因でなく、ほんとうの原因に伴う条件の一つにすぎない。

さらに(2)に、人間疎外は特定の歴史的状況の中に現われるものであるから、いつの時代にも同じ形で普遍的に現われる事実と見るわけにいかない。もちろん広義に考えれば、人間疎外はどういう時代にもあつた。古代には古代の奴隷制度に伴う人間疎外があつた。中世には農奴と領主との間に、また固着した位階制度の間に中世的な人間疎外があつた。しかし私の本論のはじめにあげたような人間のアトム化による疎外、人間の機械化、部分化によつて全体的な

ものを見失う疎外、人間が商品化され物化される疎外という形のは、古代にも中世にも存在していなかった。この疎外こそじつに近代的な、いな現代的人間疎外の形である。この形の疎外をひきおこすほんとうの原因もまた近代特有のものと見るべきで、これをいつの時代にも存在するという普遍的なものに還元することはできない筈である。ここでも人間固有の本性による普遍的な原因というようものがあつて、それから現代的な人間疎外がひきおこされているのではない。現代の人間疎外の原因は現代特有の状況の中に求めるべきであらう。

第二、現代の機械・技術をもつて人間疎外の原因とする見地について。

これにはキリスト教実存主義者が多いので、しぜんと第一の見地につながりをもっている。しかし特定の歴史的条件を顧慮する点で、第一にとどまるものとは区別される。この論者は、現代の特徴は機械・技術が人間精神生活を圧倒している点にあるとして、機械・技術の進歩が人間精神生活の危機をひきおこし、そのメカニズムの進行が人間疎外のほんとうの原因であると考えてるのである。現代の機械文明、技術文明へのつよい厭悪、反撥である。したがつてそういうものによつて精神生活の汚されていない中世にたいする精神的ノスタルジアによつて裏うちされている。機械・技術文明こそ人間生活を機械化し劃一化し、人生本来の意味というものを喪失させた。機械はもと人間のみ出したものであるにかかわらず、いまでは人の手に負えない巨大な野獸にまで成長している。この野獸に支配されているかぎり人間性の頹敗と、絶対者への忘却、ニヒリズムへの顛落はまぬがれない。機械・技術にたいする呪詛はやがて近代科学にたいする不信となる。科学もまた人間疎外を促がす側にあるものとみて、その進歩性にたいしてふかい不安を感じている。新興芸術にたいしても、それと相似た感情を向けようとする。

こういう不信と不安は、その反動として神秘思想、中世的なものを含んだ文学芸術へのあこがれを深める。要するに反合理主義の傾向がつよいのである。これは十九世紀のドイツ、ロマン派の思想とも通ずるものがある。キルケゴールがハーマンやシェリング（後にははなれるが）の影響を受けたり、ハイデッガーがヘルダリンに心をひかれるのも、これと無縁ではなからう。ベルジャエフ、オルテガ、マルセル等が現代の技術文明はじつは文化の退歩を示すものにほかならないとして、進歩主義を非難しているのも、この見地にぞくするものである。いつばんにキリスト教実存主義思想は、現代文明にたいして甚だ悲観的であり、その不安と恐怖を救うためにこそ文学・芸術・宗教が重要な役割をもつと考えて、近代科学から生み出された機械・技術のメカニズムの暴力をとり除くのでなければ人間の疎外は避けられないと考える。しかし機械・技術の巨大な暴力は、いまではちょうど魔術師の手から出た怪物のように呪法の言葉を忘れた人間の上にのしかかっている。この危機にたいして現代人はほとんど施こす道を忘れていてではないか。このように考えてこの種の論者はふかいペシミズムの調子に陥っている。

これにたいして私は、現代の機械や技術の巨大なメカニズムも現代の人間疎外のほんとうの原因であるとは思っていない。機械・技術のメカニズムはもとと中立性をもつものであつて、それは人間生活をゆたかにし、人間を幸福にするみちにも用いられるが、反対に人生を破壊し人間を破壊させるみちにもつかわれる。そのもつともいい例は原子力の開発である。このはかり知れない天与のエネルギーが人間生活を豊かにする方面にもつばら用いられるとしたら、人間の将来はどんなにすばらしいものになるであらう。反対に、もつばらそれが破壊的な科学兵器などに用いられ、世界戦争をひきおこすことになれば、人類の運命はいつたいどうなるというであらう。同様なことは、毒ガス、細菌戦争についてもいわれるであらう。しかし機械・技術のメカニズムはどこまでも中立的であつて、そのいずれに

加担するものでもない。それはどこまでも中立であつて、人類の幸福と破滅のいずれへ加担するものではない。それであるから機械・技術は決して人間疎外の原因ではない。ほんとうの原因は、メカニズムそのものにあるのでなくてその背後にあつてそれを或る特殊の目的に結びつけ、その巨大なメカニズムを操作する特定の社会構造、社会制度にあるとみななければならない。機械・技術のメカニズムは人間疎外の条件の一つにすぎないものであつて、そのほんとうの原因ではない。

第一と第二によつて、人間固有の本性は人間疎外のいわば内的条件であるにたいし、機械・技術のメカニズムはその外的条件であつて、ともに人間疎外の究極の原因ではないことが明らかになった。

第三、特定の歴史的制度をもつて人間疎外の原因とみる見地について。

第三は私自身もその中に含まれる立場である。人間固有の本性と考えるものも、人間疎外のほんとうの原因ではないし、また機械技術のメカニズムもそのほんとうの原因ではない。そこで考えられるのは、まず現実の政治権力である。なぜというと、科学兵器に含まれるメカニズムは中立であるが、これを軍備とか戦争という特殊の目的に結びつけ、じつさいにその方向を決定していくものば政治権力であるからである。現代のきわめて高度の機械・技術はほとんど例外がないというほど大国の軍事目的に結びつけられて発達した。軍備・戦争を企劃し指導するものは、国際政治であるから、それを支配する政治権力に現代人の運命は握られ、人間疎外は政治権力の発動のし方にかかわつていふと考えられる。じつさい現在の政治のように、選挙が情実と金銭によつて取引されたり、汚職に充ちたものとなつたり、高度の官僚化によつて責任の所在が不明にされたり、法令にあるという理由で権力の圧迫を加えてあやしまない政治の下では、知らず知らず国民の疎外が行われているにちがいない。最近青少年の犯罪が急激に増加したといわ

れるが、これもその責任をすべて教育の側に負わせるわけにはいくまい。つまり政治が良くなれば国民が良くなり、政治が墜落すると国民が疎外されることは、だいたいにおいて間違いがない。人間疎外の原因は政治権力にあるという見方の出るのは当然のことのように思われる。

しかし私はそうではないと思う。政治は決して人間疎外の究極の原因ではない。現代では政治をほんとうに動かしているものは責任の座にある政治家でなく、その背後にある特定の社会構造、その歴史的制度そのものであるからである。現代の政治家は彼の権力を個人としての彼自身の手に握っているのではない。彼をしてその権力をふるわせる当の実体は、彼がその中におかれている社会構造、社会制度そのものである。つまり現代の独占資本制社会の構造というものが彼をそのように行動させるのである。もし彼の思想なり行動なりが、現社会構造の上からみてその利益に合わないものとなるなら、彼をその権力の座から追いおとすことは易々たるものであろう。しかもその背後にあるものは、その実体を政治権力の座に現わさず、どこまでもその背後にあつて政治権力を動かしているのである。

独占資本制社会においては、それは独占資本家の集団になるであらう。この集団が政治への強力な圧力団体となつて、政治の焦点を独占資本制の安全と繁栄の方へ向けてゆく。この機構の中では、ほんとうに民主主義を守つて、国民の生活本位の政治を行うことは殆んど不可能であらう。独占資本家の集団は現状の変化をもつともおそれているからである。即ち現代の人間疎外のほんとうの原因は、機械・技術の高度の発達によるものでなく、また政治権力の中心にあるでもなく、高度の独占資本制社会の構造・制度の中にひそんでいるのである。商品生産のマス・プロの中では人間そのものの労力（精神的ならびに肉体的）さえも商品化され、物化される。資本の利潤追求のためには、どのような人間関係も手段にされる。失業の可能性は多くの勤労者をおびやかしている。そういう機構の中で人間対人間の

関係は全体的なつながりを失い、ばらばらに、よそよそしくアトム化されてしまう。ホッブスのいう「万人にたいする万人のたたかい」はじつは人間の社会以前の自然の状態ではなく、高度の独占資本制社会における人間のあり方を示した言葉と見るべきであろう。しかもこのような人間疎外が、企業自由とか政治の民主化とかいう美名のおかげで行われる。現代の人間疎外の特徴はひとり被支配者の側にあるだけでなく、被支配者を大量に疎外することによつて支配者自身もみずからの人間性を疎外してしまう。私はこの第三の見地をとりたいと思う。現代の人間疎外のほんとうの原因は独占資本制度そのものにあるのである。

このような人間疎外は、じつに現代の特色であつて、これは決してたんなる偶発事象ではない。現代をさして人間疎外の時代というのは充分その理由がある。このような意味をもつて大量の人間疎外が行われたことは、歴史上いまだかつてなかったであろう。

四

人間の実存は人間の限界（極限）状況においてもつとも明白にされると考えられている。実存はみずからによつてある存在でなく、状況的存在であり、たんなる日常的状况でなく限界状況においてある存在だというのである。しかしこの「限界」が、人間固有の本性に基ずくものであるならば、それは状況の条件ではあつても、状況そのものとはいわれない。だから固有の本質または本性から限界状況はひき出されない。人は死ぬものである、人間は中間者である（パスカル）、人間は絶望している（キルケゴール）といつても、そのままでは限界状況にならない。それが「限界」状況になるのは、一つの特異の状況として現われ、且つその状況に主体的な「かかわり」をもち、その状況

をみずからにひき受ける主体的人間があるからであり、そこではじめて限界状況の意味が現われるのである。人間一般の規定があつても、それはまだ特定の状況とはならない。たとえ特定の状況として現われたとしても、それを自分にひき受けて、それにかかわる主体がなければ状況の限界点といものが成立しない。実存とは、この限界にかかわる主体のあり方にほかならない。それだから限界状況はこれを実存の基本的状況と呼びかえてもよい。これによつて実存とは一般的に定義される実体ではなく、もとより客体的事物でもなく、じつに基本的な状況にかかわる主体の存在のし方である。

このような基本的状況として私は人間疎外の問題を捉えた。人間疎外の意味と原因とは、人間固有の本質または本性という一般的規定にあるのではなく、また特定の歴史的状況としての機械・技術のメカニズムにあるのでもなかった。現代の人間疎外はじつに、もつぱら、現代の高度の独占資本制の社会構造そのものの中にひそむことが明らかにされた。現代の特定の社会制度こそ現代人の歴史的の基本状況であり、その状況にかかわりをもつかぎりにおいて、現代人の実存的存在が成立することになる。現代人の実存はどこまでも人間一般の規定から出てくるものではないから、それは古代人の実存、中世人の実存とは、歴史的意義において異なるものである。現代人の実存は現代的な状況のもとにある現代人の実存である。これを古代・中世的人間の实存と同一のものに考えてはならない。われわれがここに問題にする実存は高度の資本制社会の基本的状況の中で成立したものである。

このように考えてみると、私は一つの難問につきあたる。二において実存とは人間めいめいの主体的存在であり、独自の存在であつて、これを他人に手渡すことはできないといった。実存とは主体的・個体的なものである。しかるにこれを特定の歴史的な社会制度に関連させることは、明らかに社会的条件に関連させることであつて、本来の実存

の意味をまったく放棄するものではないか。それならばとくに人間現実の二条件などを持ち出す必要はないではないか。社会的条件一本で充分なことになるではないかという反問につきあたるのである。まったくその通りであろう。前述のように考えると、現代の社会構造、制度という社会条件によつて、実存も規定されることになるわけだ。しかしほんとうにその通りだろうか。

私はそうではないと思う。たしかに現代の人間疎外のほんとうの原因は人間固有の本性にあるのではなく、特定の歴史的史な社会制度にある。そして社会制度は社会的条件として人々を共通に規定しているかぎり、そこに実存の成立するはずはない。しかし私という主体がここに存在する。この主体は、多くの人に共通する一定の社会的条件を、人間疎外の問題を通して、私自身の上に受けとめ、それに主体的なかかわりをする。大切なことはこの点である。大切なことは、人間疎外をひきおこす社会的条件をどのように受けとめ、それにどのようなかわりをするかという主体の態度である。この主体の態度こそ実存の態度にほかならない。もしこの社会的条件にたいして誰人も主体的にその身にひき受けることをしないならば、まったく他人ごととして無関心でいるならば、社会的条件は基本的状況となる機会がなく、したがつてそこに主体の実存は成立しない。もしそういう態度をとるならばそのことは主体の実存喪失としてわれわれの上にはね返つてくるだろう。実存を喪失しながらそのことに無関心でいるということこそほんとうの実存喪失というべきであろう。

だから実存とは、人間現実の社会的条件とウラ・オモテ或は並存の関係にあるものでなく、社会的条件そのものの受けとめ方、自分自身へのひき受け方にはかならない。実存とは何か実体的な存在ではなく、人間存在の基本的なあり方にはかならない。極端に言えば、人間疎外を蒙つて実存喪失にあるものがたとえ一人でも存在する間は、その原

因を追及して、その解放を求めることをやめなさいという実践的態度を意味するものである。実存とは觀念的存在でなく、実践的存在である。とにかくこのような社会的条件における人間の基本的状況の受けとめ方というものに、人間ひとりひとりの主体的な特殊性が現われる。それが実存なのである。

これでこの難問に答えることができたとして次に進もう。私は実存を人間疎外の問題を媒介として考えてきた。ところがこの意味の人間疎外は同一の原因によつていつの時代にも同じ形で現われるものでなく、古代には古代的な、中世には中世的な、近代には近代的な形をもつて行われたとすると、われわれの問題としてきた人間疎外はきわめて近代的な且つ西欧的なものといわねばならない。そうすると、それを媒介とする人間現実の実存も同様にきわめて近代的な、且つ西欧的な性格を持つということになる。果してそうだろうか。実存とは人間実存である限り、いつの時代にも、また世界のいずこにも生じ、とくに西欧的なものとして制限されてはならないように思われる。しかしよく考えてみると、われわれのとり上げた実存はどこまでも近代的で且つ西欧思想にぞくしているものである。近代的であることは、近代的な特定な歴史的社會制度を基本状況とすることから明らかであるし、また西欧高度の資本制社会の中で生じたという意味において、西欧的性格をもつことは疑いない。とくに実存が西欧的なものであることについては次の二点によつて明白にされると思う。

(1) には、西欧人は十八世紀頃から世界の近代史は西欧近代史の拡張にほかならないと信じるようになった。世界の進歩とは西欧近代の文明の進歩にほかならないことになった。まったく西欧中心の考え方である。しかるにこの信仰は第一次世界大戦によつて容易ならぬ危機に立つた。西欧的でないもの、非ヨーロッパ的なものが、西欧から学んだ民族の独立、人間平等の原理を逆手につかつて西欧に立ち向うようになった。それから第二次大戦までの中間期、

第二次大戦後においてこの危機はますます増大されてきた。大小多くの民族は独立し、新しい独立国には反西欧的傾向がつよく現われる。このような西欧の危機にたいする反映として、西欧の思想家に危機と不安の意識はしだいに濃厚になったといえる。第一次戦争後から、西欧文明の没落という言葉が語られ、孤独・絶望の調子を帯んだ思想が現われてきた。死に至る病としての絶望に実存を読みとろうとした丁抹の憂愁の哲学者キルケゴール、世紀末における西欧ニヒリズムの問題をとり上げてこれと懸念にたたかつた孤独の哲学者ニーチェを思い出させ、実存哲学の流行を見るのである。これはいうまでもなくきわめて西欧的なものである。

つぎに(2)に、われわれの問題にする人間疎外は、前述のように西欧(米国をふくむ)高度の資本制社会の中で生じたものであつて、いわば現代の爛熟した機械文明に基ずくものであるが、この機械文明というものこそ西欧資本制社会の上昇にもなつて生じてきたものである。独占資本制は商品のマス・プロを進めるために技術革命を行う必要があり、それを行えばそれだけ多くの人間を商品化し物化せざるをえなくなる。人間の非人間化がますます増大する。それによつて文明の外被につつまれた人間のアトム化、冷たいよそよそしさ、互の信頼の喪失などが濃厚にならざるをえない。これらのすべては西欧的な社会構造、社会制度に基ずくものである。そうして、これこそ現代の人間疎外の状況なのである。実存とはみずから進んでこの限界においてこれをひき受ける存在であるから、現代人の実存はきわめて西欧的なものというべきであらう。

しかしこのように実存が近代的なものであり、西欧的なものであるというのと、それならばどうして日本の思想界に

実存思想の流行を見るに至ったか、西欧とは歴史的状況のことなる東洋の日本に実存思想の行われる理由がないではないか、もし理由があるとすれば、それは「西欧的」なものとして制限されず、一般的な人間の条件を示しているからではないかという疑問がおこるであろう。しかしよく考えてみると、実存思想が日本に流行したのは、日本人が外来思想を新奇なものとして無批判に受け入れ易い傾向があるということをしばらく別として、西欧的な実存思想を受け入れるべき相当の理由をもっているからではないかと思う。その理由は前述したことにしたがつて二つあると思う。(1)には、明治以来日本人の教養はその範を多く西欧に求めた。日本の古典についてはよく知らないが、西欧文学、西欧思想については、それなりの理解をもっている青年が相当に多いではなからうか。したがって西欧的教養の危機問題は、日本の青年、知識人にそれなりの危機意識を与えたにちがいない。西欧的教養の危機と不安を意識的無意識的に、みずからの教養の危機として受けとつたとしても、それほど不思議ではないであろう。

しかし(2)に、それより多く日本人が国際独占資本制の中へしだいにしつかりと組みこまれていることから起る人間疎外について、西欧とまったく同様な運命を負わされていることの意味は重大であろう。或る人は、西欧の実存思想は機械文明にたいするキリスト教思想の抵抗であるのに、日本人はキリスト教の伝統にたいする理解が少いので、実存思想の受容は好奇心によるものであつて、ほんとうの受容ということとはできないと批判する。これも甚だもつともである。しかし西欧の実存思想必ずしもキリスト教でないことは、ニーチェ、カミュー、サルトル、ボウボワルなどにおいて見られる。私はこの(2)の点について、われわれ日本人と西欧実存思想の間に同じような現代の基本的状況のあることをふかく考えさせられる。ことに太平洋戦争は、高度独占資本制への過程において、軍部・官僚・資本家の合体によつてどうしても避けられなかつた帝国主義戦争の一形態だと見るときに、その挫折を通して経験した実存思

想に西欧と同様なものが現われたとしてもすこしも不思議なことではなからう。

五

以上の論述によつて、実存とは何かとくべつの実体ではなく、われわれが共通にもつところの社会的条件が近代的な人間疎外をひき起している場合、われわれの主体においてそれを受けとめ、それに主体的なかかわりをもつことを意味する。かかわりをもつとは人間解放のための思想と行動をひき受けることである。この見方が正しいならば特定の歴史的状況における社会的条件と実存的条件のつながり方も明らかになるであらう。もとより両者は、前述のようにその質的關係において相対立している。実存は各人の主体性であり、それは社会的条件にむかつて「自己」を貫こうとするが、社会的条件はこの主体性を特殊の目的に向つて客体化し、社会的条件の中へ吸収しようとする。しかしこのとたんに実存は、社会的存在にたいしてつよく抵抗し、いつそうその主体性を貫こうとする。

こういう両者の關係はいわゆる社会と個人との關係ではない。社会と個人との問題は社会的条件の中へ個人を合理化する過程におこる問題であつて、個人なければ社会は形成されず、社会なければ個人も形成せられないという両者不可分の原則を前提として提起されるのがふつうである。即ちこれは社会的条件の中で起る關係である。しかしここで問題にしているのは、実存的条件による実存と社会的条件による社会的存在両者の關係であつて、その間には、主体性の自己主張と、その客体化による解消との間の相容れない対立がある。この対立において質的に見れば、両者の一方から他方の条件をひき出すことのできないことは、すでに二に述べた通りである。

しかし両者の間には、この対立關係をその中に含みながら、しかもそれをのりこえて両者を綜合する關係がある。

たしかに社会的条件がまず発動しなければ実存的条件は発動しえない。社会的条件は自然的条件とつながり、自然より社会へのながい自然史的発展の中で各個人の実存というものも成立したと考えられるからである。人間はまず社会をつくることによつて個人の発達をうながし、その主体性によつてその実存を規定したのである。この点ではたしかに社会的条件は実存的条件に優越している。しかし高度の社会的条件になると、各人の実存において主体的にそれが受けとめられるのでなければ、即ち各人の主体がこれにたいして実存的なかわりをもつてなければ、社会的条件の規定は全く人間的意味を失つてしまう。現代の社会的条件はますます人間的関係を非人間化し、人間を商品化し、物化してしまう点で、すでに一つの限界に近づいているように思われる。現代の社会的存在として個人は、その人間性を剥離されて、全くのアトム化した個人にされている。どうしても各人の実存においてこれを受けとめ、その主体性にひき受けて、人間回復のみちを開かねばならない。この受けとめ方はもとよりワクによる劃一化であることはできないであろう。そこには陰影の刻みのある人間的な主体的多様性がつくり出される。それは当然のことであつて、この多様性がなければ、社会的条件はまったく非人間的なメカニズムの運動になつてしまう。

この多様性は各人の実存から出るものである。しかしこの多様性は、各人が人間疎外から人間回復を求めるという実践において、一つのものにつき貫かれている。それが前述した全体的人間の自己実現の方向である。それは社会的条件によつて各人共同に規定されている社会的存在と、それにかかわりを求めている各人の実存との実践的なつながりを示すもので、両者の総合はここにおいてはじめて可能になるのである。

人間現実の社会的条件と実存的条件、各人の社会的存在と実存とは、質的に、主体性の問題において対立しながら、疎外からの解放の実践において、全体的に総合される。それが全体的人間の立場である。人間疎外はどこまでも

解放されるべきである。それをわれわれ自身の問題として主体的に受けとめること、人間疎外からの人間解放こそわれわれに負わされた実践的課題である。そのためには人間疎外のほんとうの原因がどのような形でひそんでいるかを、社会科学によつて明らかにし、これに媒介されて、既存の社会的条件に変更を加え、或は新しい社会的条件をつくり出す実践的思想と行動とが必要になる。この点で、人間をほんとうに解放するには実存的態度と、社会的条件の両者の実践的綜合こそ必要だということになる。この綜合こそ全体的人間の立場なのである。

全体的人間の自己実現とは、人類の安全と幸福を実現することにほかならない。人間疎外から人間解放への実践はおのずから人類の解放にまで到達しなければならない。人類の安全と幸福を創造することこそわれわれにとつて最高の倫理であると思うのである。(一九六〇、九、四)